

|| 企業調査レポート ||

ヒーハイト精工

6433 東証 JASDAQ

[企業情報はこちら >>>](#)

2018 年 7 月 17 日 (火)

執筆：客員アナリスト

寺島 昇

FISCO Ltd. Analyst **Noboru Terashima**



FISCO Ltd.

<http://www.fisco.co.jp>

目次

■ 要約	01
1. 2018年3月期(実績): 営業利益は予想を下回ったが前期比では54.6%増	01
2. 2019年3月期通期(予想): コスト増を見込み5.0%増収、3.7%増益予想	01
3. 中期経営方針: 「不易流行」に沿って経営を推進	01
■ 会社概要	02
1. 会社概要	02
2. 沿革	03
■ 事業概要	05
1. 事業セグメント	05
2. 直動機器	05
3. 精密部品加工	06
4. ユニット製品	06
5. 特色、強み、競合	07
■ 業績動向	08
1. 2018年3月期の業績概要	08
2. 品目別状況	09
3. 財務状況	09
4. キャッシュ・フローの状況	10
■ 今後の見通し	11
1. 2019年3月期の業績見通し	11
2. 品目別見通し	12
■ 中長期の経営方針とターゲット市場	12
1. 「不易流行」に沿って経営を推進	12
2. PMマトリックス: 既存製品を新規顧客向け、新製品を既存顧客向けに注力	13
3. ターゲット市場(顧客)	13
■ 株主還元策	14

■ 要約

主力事業は高度な精密部品加工。R&D 用やレース用特殊部品に強み

ヒーハイト精工 <6433> の主力事業は、高度な精密部品加工であり、主に 3 つの領域（直動機器、精密部品加工、ユニット製品）に分けられている。主要顧客として THK<6481> や本田技研工業 <7267>（以下、ホンダ）の研究所を抱えており、同社の技術力が高いことを裏付けている。ただし、大部分が OEM 供給や研究開発用やレース用車種の特特殊部品であることから、業績が急変することは少ない。今後は、現在持っている高い加工技術を生かして新分野へ展開することで成長を目指している。

1. 2018年3月期（実績）：営業利益は予想を下回ったが前期比では 54.6% 増

2018年3月期決算は、売上高が前期比 19.2% 増の 2,623 百万円、営業利益が同 54.6% 増の 225 百万円、経常利益が同 75.4% 増の 234 百万円、親会社株主に帰属する当期純利益が同 97.6% 増の 166 百万円となった。親会社株主に帰属する当期純利益の伸び率が高いのは、前期は 24 百万円の特別損失（固定資産除却損）が計上されたためである。

2. 2019年3月期通期（予想）：コスト増を見込み 5.0% 増収、3.7% 増益予想

2019年3月期通期の業績は、売上高で前期比 5.0% 増の 2,756 百万円、営業利益で同 3.7% 増の 233 百万円、経常利益で同 1.0% 増の 237 百万円、親会社株主に帰属する当期純利益で同 3.9% 減の 159 百万円と予想されている。上半期までの業績はある程度読めているようだが、主要顧客の動向が下半期は不透明であることから堅めの予想となっている。

3. 中期経営計画：「不易流行」に沿って経営を推進

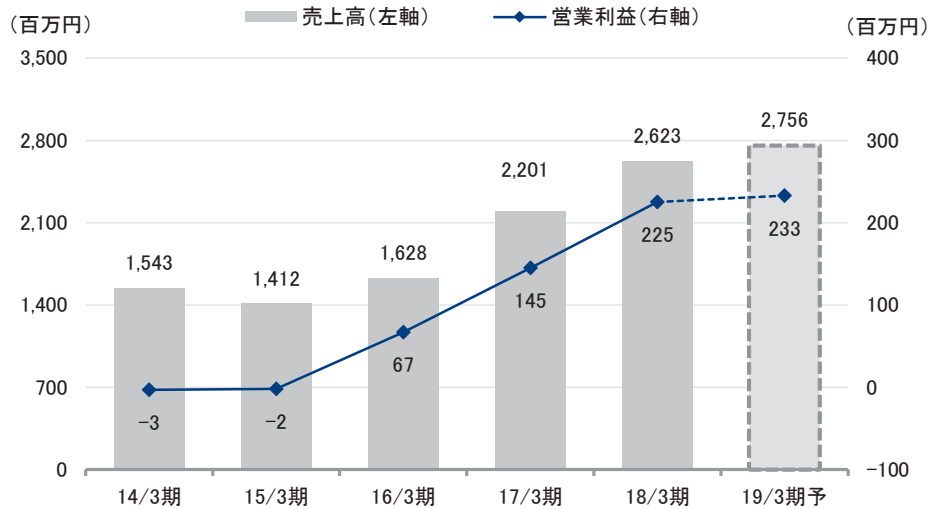
特別な中期経営計画は発表していないが、松尾芭蕉が唱えた「不易流行」（どのような時代や環境になろうとも、変えてはならないことと、その時代、時代の環境の変化に順応していかなければならないことがある）の考えに基づいて、今後も市場の変化を注視して取るべきアクションを慎重に見極めながらも、一度決めたら素早いスピードで Shift していくことを経営の基本方針としている。

Key Points

- ・ 高度な精密部品加工が主力事業、大手向け OEM や特定顧客向け売上高が多い
- ・ 2019年3月期通期業績は、5.0% 増収、3.7% 増益と堅め予想
- ・ 経営方針は「不易流行」、今後も市場の変化を見極める

要約

売上高と営業利益の推移



出所：決算短信よりフィスコ作成

■ 会社概要

**高度な精密部品加工が主力事業。
直動機器の OEM 供給やレース用特殊部品が多い**

1. 会社概要

同社の設立は1962年に遡り、現在の主力事業は、高度な精密部品加工である。主に3つの領域（直動機器、精密部品加工、ユニット製品）で事業を展開しているが、主要顧客としてTHKやホンダを抱えており、同社の技術力が高いことを裏付けている。ただし現在は、大部分がOEM供給、レース用車種の特種部品等であることから、業績が急成長する可能性は小さい。今後は、現在持っている高い加工技術を生かして新分野へ展開することで成長を目指している。

会社概要

2. 沿革

同社は、1962年に創業者尾崎久壽彌（おざきくすや）氏によって川崎市に設立された。久壽彌氏は慶應義塾大学の文系の卒業であったが、これからの日本は物づくりが重要であるとの認識から、様々な部品加工を行う同社を設立した。その後1964年にはリニアボールブッシュの研究開発を開始、翌年には他に類のない含油焼結合金ソリッド型保持器の開発に成功して、画期的リニアボールブッシュの製造に着手した。1968年には日本精工<6471>とリニアボールブッシュのOEM供給契約を締結、NSKブランドで販売を開始した。その後、1980年には工作機械及び産業機械等の直動案内機構用としてアンギュラウェイの製造販売を開始、1987年にはポジショニングステージ及びパラレルメカニズム構造の位置決めステージを開発、数々の特許を取得した。

1990年にはリニアボールブッシュでTHKとの取引を開始したのに伴い、秋田市豊岩工業団地に秋田工場を新設した。さらに1997年には球面軸受の特許を取得し、1999年から製品を販売している。さらに1999年にはプレス機械や金型用の高剛性直動軸受けに最適なサーキュラークローラガイドを開発し、販売を開始した。2004年株式公開を機に2005年、現在の代表取締役社長尾崎浩太（おざきひろた）氏に社長交代する。2010年には円筒直動軸受けに「回転ベアリング一体型ボールスプラインユニット」「ミニチュアボールねじスプライン(BSSP)」の2製品をラインアップした。さらに小径直動ベアリング「有限ストロークボールスプライン」シリーズ12種を発表している。

その後も2013年に民生向けリニアボールブッシュ「UTB (Utility Track Ball)」の販売を開始、2014年には釣り用ルアーの大手メーカーであるメガバス(株)の新可動ウエイトシステム「LBO (Linear Bearing Oscillator)」に同直動軸受技術が採用された。2016年にはUTBシリーズにスリムタイプ、ロングタイプ、ロングスリムタイプを追加してラインアップを拡充した。

株式については、2004年に日本証券業協会へ店頭登録され、その後取引所の合併等に伴い、現在では東京証券取引所JASDAQ（スタンダード）に上場されている。

ヒーハイト精工 | 2018年7月17日(火)
 6433 東証 JASDAQ | <http://www.hephaist.co.jp/>

会社概要

沿革

1962年7月	精密部品の製造事業を目的として、資本金 500 万円で神奈川県川崎市にヒーハイト精工株式会社を設立する。
1964年9月	リニアボールプッシュの研究開発を開始する。
1965年1月	事業拡張のため、埼玉県川越市に工場を新設し、移転する。
1965年5月	本社を東京都板橋区小豆沢町に移転する。 独創的発想による、他に類のない含油焼結合金ソリッド型保持器の開発に成功し、画期的リニアボールプッシュの製造に着手する。
1968年6月	資本金：1,000 万円に増資
1968年11月	日本精工 <6471> とリニアボールプッシュの OEM 供給契約を締結し、NSK ブランドで販売を開始する。(1984>年 1 月同社特許終了につき契約解除)
1980年4月	業務内容拡大に伴い、埼玉県川越市芳野台の工業団地に工場を新設し、移転する。
1980年6月	工作機械及び産業機械等の直動案内機構用としてアングュラウェイの製造販売を開始する。
1981年5月	欧米市場へアングュラウェイの販売を開始する。
1990年11月	秋田市豊岩工業団地に秋田工場を新設する。
1997年2月	球面軸受に関する特許を取得する。
1999年4月	球面軸受の販売を開始する。
2004年6月	株式を証券業協会へ店頭登録する。
2004年7月	世界最小リニアボールプッシュ LM2 開発
2005年8月	本社工場（埼玉県川越市芳野台）を売却し、埼玉県川越市今福に本社・埼玉工場を新設し、移転する。
2007年3月	ISO9001 を認証取得する。 カートレース「ARTA Challenge」プロジェクトに協賛する。
2010年1月	円筒直動軸受に 2 製品ラインアップ「回転ベアリング一体型ボールスプラインユニット」「ミニチュアボールねじスプライン (BSSP)」
2010年7月	エコアクション 2.1 (環境経営システム) を認証取得する。小径直動ベアリング「有限ストロークボールスプライン」シリーズ 12 種発表
2011年6月	中国上海市に販売子会社「赫菲（上海）軸承商貿有限公司」設立
2012年7月	中国蘇州市に直動軸受製品の生産拠点「赫菲（上海）軸承商貿有限公司 蘇州分公司」設立
2013年3月	リニアボールプッシュシリーズのラインアップにロウ付けタイプのインローフランジ、センターフランジを追加
2013年6月	民生向けリニアボールプッシュ「UTB (Utility Track Ball)」を販売開始
2013年7月	東京証券取引所と大阪証券取引所の現物取引市場統合により、東京証券取引所 JASDAQ (スタンダード) に上場
2014年3月	高強度プラスチックを採用し、組付け性・コストバランスを両立した「ハイブリッドフランジリニアボールプッシュ (JFK シリーズ)」を販売開始
2014年12月	メガバス (株) と共同開発した 新可動ウエイトシステム「LBO (Linear Bearing Oscillator)」に当社の技術が採用
2015年4月	UTB シリーズのラインアップにスリムタイプを追加
2016年2月	UTB シリーズのラインアップを拡充し、スリムタイプに加えロングタイプ、ロングスリムタイプを追加
2018年2月	秋田工場に加工室を新設する。
2018年3月	本社・埼玉工場の倉庫を建て替える。

出所：ホームページよりフィスコ作成

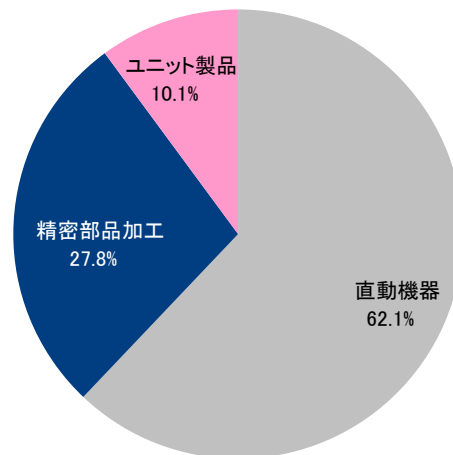
■ 事業概要

直動機器、精密部品加工、ユニット製品の3領域に展開

1. 事業セグメント

同社の事業セグメントは、厳密には精密機器製造事業だけであり決算短信等では詳細なセグメント情報は開示されていないが、決算説明会資料などでは「直動機器」「精密部品加工」「ユニット製品」の3分野に分けられている。2018年3月期の分野別売上高は、直動機器が1,628百万円（売上高比率62.1%）、精密部品加工が729百万円（同27.8%）、ユニット製品が265百万円（同10.1%）となっている。

品目別売上高
 (2018年3月期:2,623百万円)



出所：決算短信よりフィスコ作成

2. 直動機器

直動機器とは、直進する力を可能な限りスムーズに（摩擦抵抗を少なく）伝えるための精密部品であり、主に各種の工作機械や半導体製造装置等に使われる。同社製品としては、次世代型ボールブッシュ UTB (Utility Track Ball)、ハイブリッドフランジボールブッシュ (JFK)、リニアボールブッシュ、ボールスプラインユニットなどがある。この分野の売上高の約90%がTHK向けのOEM販売で、同社から製品を仕入れたTHKが自社ブランドで世界各地へ販売している。残りの10%ほどが自社販売だが、この中には大手ルアーメーカー向け※も含まれている。

※ ルアーの中に同社の直動製品が使われている。

事業概要



出所：会社資料より掲載

OEM とはいえ、注文は「定期」プラス「スポット」で入る。生産効率を高めるため、見込生産を行い一定量の在庫を保有している。近年は型番も増加し多品種少量の傾向が強まっているため、利益面ではやや厳しさが増している。需要（売上高）は THK の販売状況に左右されるが、最終的には FA 市場の動向や設備投資動向に影響される。

3. 精密部品加工

レース用車両向け、研究開発用、試作用などの特殊・特注部品を製造しているが、現在では約 95% がホンダ向けである。したがって売上高は、ホンダの新製品開発や各種レースへの関与度に大きく左右される。様々な複雑かつ精密な加工に加えて短納期も要求される場合が多く、多種類の工作機械を保有する必要がある。その結果、どうしても機械の稼働率は低くなってしまいが、このような難しい注文に対応していることが顧客（ホンダ）からの信頼につながっている。

4. ユニット製品

直動の技術と軸受けの技術を組み合わせた製品で、精密位置決め装置、アライメントステージ（XY θ ステージ、XY θ Z ステージ）、球面軸受などがある。液晶や有機 EL など、正確な貼り合わせ（位置決め）を必要とする装置などに使われる。この分野の多くは中国の中堅 LCD メーカー向けとなっている。ユニット製品の多くは、LCD 製造装置等に組み込まれるため、需要はこれらフラットパネルディスプレイ業界の設備投資動向に左右される。

事業概要



アライメント (XY θ) ステージ
 NAF3C-16K)
 Alignment (XY θ) stage
 出所：会社資料より掲載



チルトステージ (Z 軸アクチュエータ)
 Tilting stage (Z-Axis actuator)

5. 特色、強み、競合

(1) 高い技術力

同社の最大の特色は、精密部品加工における長い歴史と高い技術力だろう。前述のように過去においても数多くの特許を取得しており、このように蓄積された経験と技術力がホンダを始めとした主要顧客から評価されていると言える。

(2) 大手顧客との信頼関係

THK やホンダとの長い取引が続いているが、このような大手顧客との付き合い、信頼関係も同社の技術力を高めるうえでは強みと言えるだろう。

(3) 競合

前述のように同社の製品は、直接競合する企業は多くはない。あえて競合企業として挙げるとすれば、直動機器におけるミスミグループ本社 <9962> や日本ベアリング (株) などがある。

しかし同社にとっての本当の意味での競合は、むしろ技術革新そのものかもしれない。技術革新によって新しい部品が登場することで、同社製品の需要が減少してしまうことはあり得る。その意味では、後述するように同社自身が常に新製品、新市場 (顧客) の開拓に努めることが重要になってくるだろう。

業績動向

2018年3月期は増益ながら予想をやや下回った

1. 2018年3月期の業績概要

発表された2018年3月期決算は、売上高が前期比19.2%増の2,623百万円、営業利益が同54.6%増の225百万円、経常利益が同75.4%増の234百万円、親会社株主に帰属する当期純利益が同97.6%増の166百万円となった。親会社株主に帰属する当期純利益の伸び率が高いのは、前期は24百万円の特別損失(固定資産除却損)が計上されたからである。

各利益の前期比での増益率は高いが、予想(営業利益257百万円、経常利益255百万円)に対しては下回った。この要因は、THK向けは受注は好調であったが、生産がやや追い付かなかったことに加え、ホンダ向けが期ズレしたためである。また設備投資や人員増により一部のコストを前倒ししたことや賞与を支給したことも営業利益が予想を下回った要因となった。

設備投資額は、285百万円(前期139百万円)、減価償却費は118百万円(同115百万円)であったが、主な投資は、秋田工場での機械加工室新設及び新規加工機(CNC旋盤)の導入などであった。

2018年3月期業績

(単位：百万円)

	17/3期		18/3期			
	金額	構成比	実績	構成比	増減額	前年比
売上高	2,201	100.0	2,623	100.0	422	19.2%
直動機器	1,218	55.3	1,628	62.1	410	33.7%
精密部品加工	725	33.0	729	27.8	3	0.5%
ユニット製品	257	11.7	265	10.1	8	3.1%
売上総利益	600	27.3	728	27.8	128	21.3%
販管費	454	20.7	503	19.2	48	10.7%
営業利益	145	6.6	225	8.6	79	54.6%
経常利益	133	6.1	234	8.9	100	75.4%
親会社株主に帰属する当期純利益	84	3.8	166	6.3	82	97.6%

出所：決算短信よりフィスコ作成

業績動向

2. 品目別状況

各品目別状況は以下のようであった。

(1) 直動機器

THK 向けが好調であったことから、売上高は 1,628 百万円（前期比 33.7% 増）となった。しかし受注が好調過ぎて生産がやや間に合わなくなったこともあり、一部で人海戦術で対応したことから、コストが予想以上に増加し、利益への貢献は予想を下回った。

(2) 精密部品加工

売上高は 729 百万円（同 0.5% 増）とほぼ前期並みにとどまった。ホンダ向けは期の前半は好調であったが、下半期に入ってからレース用部品の対応等の影響もあり、一部の受注が期ずれしたことから、下半期の売上高は予想を下回り、通期では前年比でほぼ横ばいになった。

(3) ユニット製品

売上高は 265 百万円（同 3.1% 増）と前期比で微増にとどまったが、中国での液晶メーカーの設備投資がややスローダウンしてきたことの影響を受けた。

自己資本比率は 66.1% と安定

3. 財務状況

2018年3月期末の総資産は前期末比400百万円増の4,935百万円となった。流動資産は同214百万円増の2,709百万円となったが、主に現金及び預金の増加162百万円、受取手形及び売掛金の減少109百万円、棚卸資産の増加55百万円による。固定資産は同185百万円増の2,226百万円となったが、主に設備投資による有形固定資産の増加154百万円による。

流動負債は同313百万円増の1,162百万円となったが、主に支払手形及び買掛金の増加73百万円、電子記録債務の増加80百万円、短期借入金等の増加41百万円による。固定負債は同71百万円減の508百万円となったが、主に約定弁済による長期借入金の減少60百万円による。この結果、負債合計は同241百万円増の1,671百万円となった。

純資産は当期純利益の計上などによる利益剰余金の増加等により同158百万円増の3,264百万円となった。

業績動向

貸借対照表

(単位：百万円)

	17/3 期末	18/3 期末	増減額
現金及び預金	950	1,112	162
受取手形及び売掛金	472	363	-109
棚卸資産	696	751	55
流動資産計	2,494	2,709	214
有形固定資産	1,894	2,048	154
無形固定資産	11	20	9
投資その他の資産	135	157	21
固定資産合計	2,041	2,226	185
資産合計	4,535	4,935	400
支払手形及び買掛金	426	500	73
電子記録債務	84	164	80
短期借入金等	135	177	41
流動負債合計	849	1,162	313
長期借入金	378	318	-60
役員退職慰労引当金	92	103	10
固定負債合計	580	508	-71
負債合計	1,429	1,671	241
純資産合計	3,106	3,264	158

出所：決算短信よりフィスコ作成

4. キャッシュ・フローの状況

2018年3月期の営業活動によるキャッシュ・フローは422百万円の収入であったが、主な収入は税金等調整前純利益232百万円、減価償却費118百万円、仕入債務の増加151百万円等であった。投資活動によるキャッシュ・フローは211百万円の支出であったが、主な支出は有形固定資産の取得181百万円等であった。財務活動によるキャッシュ・フローは50百万円の支出であったが、主な支出は長短借入金の減少18百万円、配当金の支払額12百万円等であった。

この結果、期中の現金及び現金同等物は162百万円増加し、期末の現金及び現金同等物残高は1,112百万円となった。

業績動向

キャッシュ・フロー計算書

(単位：百万円)

	17/3 期	18/3 期
営業活動によるキャッシュ・フロー	305	422
税金等調整前純利益	112	232
減価償却費	115	118
売上債権の増減額 (- 増加)	-325	9
仕入債務の増減額 (- は減少)	264	151
投資活動によるキャッシュ・フロー	-133	-211
有形固定資産の取得	-121	-181
財務活動によるキャッシュ・フロー	34	-50
長短借入金の増加 (ネット)	59	-18
配当金の支払額	-6	-12
現金及び現金同等物の増減額	205	162
現金及び現金同等物の期末残高	950	1,112

出所：決算短信よりフィスコ作成

■ 今後の見通し

主要顧客向け不透明で微増益予想

1. 2019年3月期の業績見通し

2019年3月期通期の業績は、売上高で前期比5.0%増の2,756百万円、営業利益で同3.7%増の233百万円、経常利益で同1.0%増の237百万円、親会社株主に帰属する当期純利益で同3.9%減の159百万円と予想されている。

売上高については、上半期はある程度読めているが、下半期についてはTHK向けは堅調に推移する見込みだが、ホンダ向けが不透明であることから5.0%増と堅めに予想されている。利益については、引続きコスト増が予想されること、製品別の売上比率が変わる見込みであることなどから営業利益率は低下すると予想されている。当期純利益については、税金等の関係で前期比減益を見込んでいる。

今後の見通し

2019年3月期の通期業績(予想)

(単位:百万円)

	18/3期		19/3期(予)		(増減)	
	金額	構成比	予想	構成比	金額	前年比
売上高	2,623	100.0	2,756	100.0	132	5.0
直動機器	1,628	62.1	1,692	61.4	63	3.9
精密部品加工	729	27.8	762	27.6	32	4.5
ユニット製品	265	10.1	301	10.9	35	13.3
営業利益	225	8.6	233	8.5	7	3.7
経常利益	234	8.9	237	8.6	2	1.0
親会社株主に帰属する 当期純利益	166	6.3	159	5.8	-7	-3.9

出所:決算短信よりフィスコ作成

2. 品目別見通し

(1) 直動機器

THK 向けは引続き堅調に推移する見込みだが、生産が追い付くかが懸念されるため、売上高は 1,692 百万円(前期比 3.9% 増)、とやや堅めの予想となっている。生産が十分に立ち上がってくれば、更なる増収の可能性はありそうだ。ルアー向けは堅調に推移する予想。

(2) 精密部品加工

ホンダ向けの動向が不透明であることから、売上高は 762 百万円(同 4.5% 増)と微増収を見込んでいる。

(3) ユニット製品

中国の LCD メーカー向けが回復する見込みで、売上高は 301 百万円(同 13.3% 増)が予想されている。

■ 中長期の経営方針とターゲット市場

経営の基本方針は「不易流行」

1. 「不易流行」に沿って経営を推進

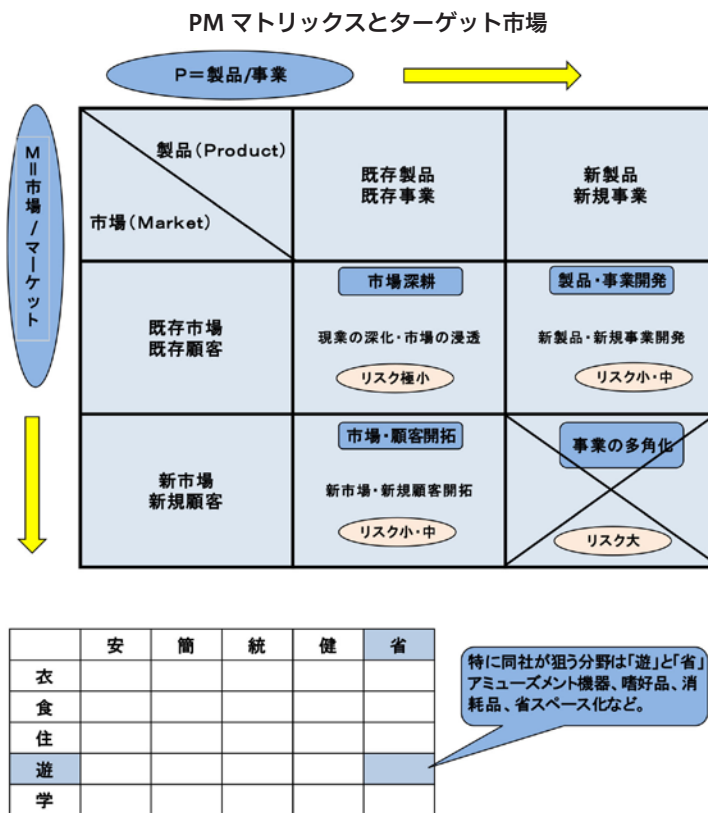
同社では特に中期経営計画等は発表していないが、今後の経営方針として「不易流行」を掲げている。この「不易流行」とは、松尾芭蕉が「奥の細道」で体得した理念。「不易」とはどのような時代や環境になろうとも、変えてはならないこと。「流行」とは、その時代、時代の環境の変化に順応していかなければならないこと。

同社でも、社会構造の変革期ことこそ、経営や業務の「不易と流行」を再確認する絶好のチャンスと捉えている。今後も市場の変化を注視して取るべきアクションを慎重に見極めながらも、一度決めたら素早いスピードで Shift していくことを経営の基本方針としている。

中長期の経営方針とターゲット市場

2. PM マトリックス：既存製品を新規顧客向け、新製品を既存顧客向けに注力

同社では、「製品」及び「市場」に対してそれぞれ「既存」「新規」に分けた PM マトリックスの中で今後の事業展開を考えている。つまり、今後の事業展開として既存製品を既存市場（顧客）に販売していくのは当然だが、それ以外に「既存製品を新規顧客に」、「新製品を既存顧客に」、「新製品を新規顧客に」拡販していくことが考えられる。しかし同社では、最後の「新製品を新規顧客に」はリスクが高いため注力しない方針だ。その替わり、新製品を既存顧客に、既存製品を新規顧客に対して拡販することに注力する方針だ。



出所：会社資料よりフィスコ作成

3. ターゲット市場（顧客）

同社が今後ターゲットとする顧客（市場）はマトリックスの中から、アミューズメント機器、嗜好品、消耗品、省スペース化などの分野を狙っていく方針だ。

■ 株主還元策

まずは安定配当が基本方針

同社は株主還元策として配当を実施している。2018年3月期は年4.0円の配当を実施、2019年3月期も4.0円が予想されている。2019年3月期の予想配当性向は15.6%となり、決して高い水準ではないが、まずは安定的に利益を計上することが先決だろう。そのためにも設備投資を活発化させており、当面は配当性向は低い水準にとどまりそうだが、将来は利益の安定化に伴い配当も上げていく方針だ。

重要事項（ディスクレーマー）

株式会社フィスコ（以下「フィスコ」という）は株価情報および指数情報の利用について東京証券取引所・大阪取引所・日本経済新聞社の承諾のもと提供しています。“JASDAQ INDEX”の指数値及び商標は、株式会社東京証券取引所の知的財産であり一切の権利は同社に帰属します。

本レポートはフィスコが信頼できると判断した情報をもとにフィスコが作成・表示したものです。その内容及び情報の正確性、完全性、適時性や、本レポートに記載された企業の発行する有価証券の価値を保証または承認するものではありません。本レポートは目的のいかんを問わず、投資者の判断と責任において使用されるようお願い致します。本レポートを使用した結果について、フィスコはいかなる責任を負うものではありません。また、本レポートは、あくまで情報提供を目的としたものであり、投資その他の行動を勧誘するものではありません。

本レポートは、対象となる企業の依頼に基づき、企業との電話取材等を通じて当該企業より情報提供を受けていますが、本レポートに含まれる仮説や結論その他全ての内容はフィスコの分析によるものです。本レポートに記載された内容は、資料作成時点におけるものであり、予告なく変更する場合があります。

本文およびデータ等の著作権を含む知的所有権はフィスコに帰属し、事前にフィスコへの書面による承諾を得ることなく本資料およびその複製物に修正・加工することは堅く禁じられています。また、本資料およびその複製物を送信、複製および配布・譲渡することは堅く禁じられています。

投資対象および銘柄の選択、売買価格などの投資にかかる最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願いいたします。

以上の点をご了承の上、ご利用ください。

株式会社フィスコ